

母豚へのポーシリス® STREPSUIS ワクチン接種と離乳子豚におけるレンサ球菌症発症率と事故率への効果

奥村 華子、 杉山 正徳、 呉 克昌
 (有)バリューファーム・コンサルティング、茨城県つくば市西大井 1704-3

はじめに

ストレプトコッカス スイス感染症(以下レンサ球菌症)は、沈鬱、髄膜炎、関節炎などの症状を示し、日本では離乳舎における一般的な事故理由の一つである。レンサ球菌症に対するワクチン、ポーシリス® STREPSUIS (インターベット)が、日本では2008年6月に子豚用ワクチンとして販売開始された。ヨーロッパではこのワクチンは母豚用としても認可を受けており、その効果も報告されている。今回の野外調査では、分娩前母豚へのポーシリス® STREPSUIS 接種することによる、離乳子豚におけるレンサ球菌症の発症率および事故率に対する効果について評価検討した。

材料および方法

本農場は母豚規模 3600 頭の一貫生産農場で、離乳は 15~16 日令での早期隔離離乳(SEW)方式をとっており、レンサ球菌症が離乳子豚で頻繁に発症していた。

今回、ポーシリス® STREPSUIS を分娩前に接種した母豚由来の子豚 4,154 頭(ワクチン接種群)と、

ワクチン接種されていない母豚由来の子豚 4,093 頭(ワクチン非接種群)を調査に用いた。母豚へのワクチンは分娩 6 週間前と 3 週間前の 2 回、1 ドース 2ml ずつを接種した。レンサ球菌症の診断は、沈鬱や起立困難などの臨床症状のみをもとに判定した。レンサ球菌症の発症率および事故率は、調査開始した 2008 年 7 月から、離乳舎での全飼養期間(離乳 15-16 日令から約 65 日令まで)について調査した。

結果と考察

ワクチン接種群において、レンサ球菌症の発症率および事故率の明らかな低下が認められた(図 1, 2)。ワクチン接種群ではワクチン非接種群と比較し、レンサ球菌症の発症率(治療頭数割合)は 5.3%減少し、離乳期間全体の事故率および連鎖球菌症を原因とする事故率はそれぞれ 1.5%、2.1%減少した。

今回の野外調査の結果では、母豚へのポーシリス® STREPSUIS 接種は、離乳子豚のレンサ球菌症の低減に非常に効果的であった。

図 1. レンサ球菌症の発症率(治療頭数)

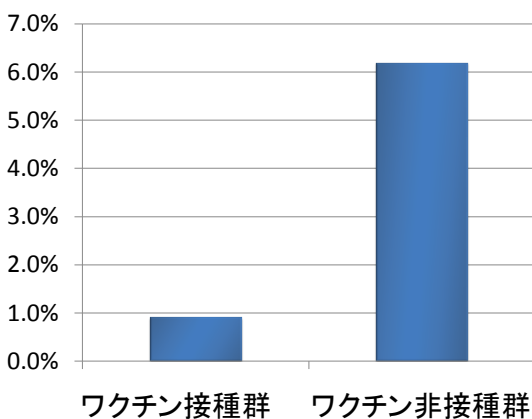


図 2. 全体の事故率およびレンサ球菌症を原因とする事故率

